

I can't put up with nuclear fuel circle.

# だまっちゃおられん！

核燃料サイクル施設立地反対津軽地区連絡会議 会報NO. 13 2010年8月30日発行



## 六ヶ所へ行って風船を飛ばそう

# バルーンメッセンジャーOperation 実施

## メッセージハガキ横浜町雲雀平から1枚戻る！

核燃・だまっちゃおられん津軽の会では、弘大ランチが中心となって、学生や若い世代に核燃問題を伝え広げる運動の一環として、7月4日にバルーンメッセンジャーオペレーションを実施し、弘前大学の学生9人を含む29名が参加しました。一行は、原燃のPRセンターを解説付で見学する他、六ヶ所再処理工場近くから風船を飛ばして核燃反対のアピールを行いました。風船には、これが届いたところには確実に放射能も届きますという説明文と拾った方は投函してくださいというハガキを付けました。



△ くまり返る風船の糸

折からの風にあおられて、風船のひもがからまって大変なことになってしまい作戦

は困難を極めましたが、参加した皆さんは、それぞれ知恵と道具を出し合っぴもを切ったりつないだりして親交を深め、楽しみました。

午後は、長年核燃問題に取り組んでがんばっている花とハーブの里の菊川慶子さんをお訪ねし、地元でがんばっている苦労や希望につながるお話を聞き、無農薬栽培のハーブティーをいただきました。後日、横浜町雲雀平からハガキが1通戻ってきました。

往路の車中では、「核燃あいうえお大作戦」というゲームが行われ、参加した大学教授や教授OB、岩木山を考える会の事務などが、「あ」から「ん」までの核燃に関係するワードの説明を行いました。何が飛び出すかわからないドキドキ感と、司会を務めた大坪代表にあてられるドキドキ感で、盛り上がりました。

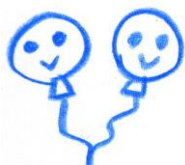


△ 菊川慶子さんのお話を聞く一行局長

### 「核燃・あいうえお大作戦」ゲームで出された言葉

あー青森県上北郡六ヶ所村	(ここで六ヶ所村に到着)	ほ 放射能から子どもを守る母親の会
いー岩手県・岩木山	た 脱原発	ま 埋設施設
うーウラン235	ち チェルノブイリ	み 三沢基地
えーエネルギー	つ 津軽の会	む むつ小川原開発
おー汚染	て 電源三法交付金	め 迷惑施設
かー核燃サイクル施設建設反対運動	と 東海村	も MOX
きー菊川慶子	な ナトリウム漏れ	や やませ
くークリプトン	に 日本原燃株式会社	ゆ 夢のエネルギー
けー原子力発電	ぬ NUMO(原子力発電環境整備機構)	よ 横浜断層
こー高速増殖炉	ね 燃料棒	ら ラ・ハーグ再処理工場
さー坂本龍一	の 濃縮ウラン工場	り 立地反対連絡会議
しー小児ガン	は 白血病	る ルテニウム
すースワニー	ひ 東通原発	れ れんが回収
せーセシウム	ふ プルサーマル	ろ 六ヶ所村化
そーソーラー発電	へ 返還廃棄物	わん わんわんプロジェクト

### バルーンメッセンジャーに参加した学生さんから感想文が寄せられました



私は、今回「風船とばし大作戦・バルーンメッセンジャー Operations」に友人とともに参加させていただきました。

まず、この企画に参加したいと思ったきっかけには、私自身が県外者であり、青森に来て2年目が経つ今、青森県についてもっと知りたい、知る必要があると考えていたときに、この企画のポスターをみたから、ということがあげられます。人文学部の学生なりに青森を襲う放

射能の脅威について、実際に現地に赴くことで考えてみたいと思いました。

六ヶ所村に到着してまず感じたことは、正直に言うと、村全体にあまり活気がない、ということでした。生憎の曇天も作用してのことなのかもしれませんが、行きバスの中で先生が仰っていたように、六ヶ所村の財政状況や在り方が再処理工場という放射能の危険を伴う施設を招いてしまったという流れを、村を訪れた人に納得させてしまう部分があったように思えます。

そして最初に訪れた六ヶ所日本原燃PRセンターでは、再処理工場とはなんなのか、どのような工程で核燃料をリサイクルするのか、周辺地域に及ぼす影響はどのようなものなのかを実物の8割の模型やパネルを見てまわりながら、ガイドの方に説明を受けました。この企画の参加するまでは、この施設に無関心だったので、恥ずかしながら私は六ヶ所村にある施設を東通村の原子力発電所と混同していましたし、再処理工場がまだ本格起動していないということも知りませんでした。言ってしまうと、再処理工場が原子力発電所に出たゴミを処理するところだという認識だけでなく、残念ながら、六ヶ所村の周辺に住む人々以外、とりわけ県外者の多くは私のような認識の程度が低いと思われます。

また、結局は人にも有害な放射能が漏れているという事実についても同様だと思います。マスメディアの力は絶大なものであり、最近ではCM等で原子力発電所や埋立地の安全性は保障されている、というように言っているためです。万が一事故が起きたら放射能が漏れてしまうかもしれない、というのであればまだ話はわかりますが、地殻の差による放射線量にも及ばない微量なものであっても、通常運行時に放射能が漏れているというのであれば全く話は別物です。しかも、まだ本格起動前であるため、その数値もあくまで理想の予想値であり、いくら安全性に細心の注意を払うといわれても、放射能にさらされる不安は消えることはありません。

付け加えて、PRセンターの遊園地のアトラクションのような内装や、今の流行りである「ゆるキャラ」ともいえる日本原燃のカエルのマスコットキャラクターは、原子力発電関係全体に親近感や安心感を与え、放射能に対する危険意識を薄めることに大きく関係しているように思えました。私自身、カエルのマスコットキャラクターにはかなりの好感をおぼえました。私たちは、これからもあらゆる角度から巧みな手段で安全性をアピールされることになると思いますが、周辺住民代表として私たちにお話を聞かせてくださった

菊川さんのように、原子力関係の施設が自分の町にやってくることによって健康や仕事だけに限らず、人生に重大な影響をもたらされてしまう人がいるということも頭に置いた上で、正確な情報に基づいた判断ができるようにしなければならないと思います。

最後になりましたが、今回様々な思いを乗せて飛ばした風船はどこまで届いたのでしょうか。一枚でも多くの返答がきて、核燃と私たちのこれからについて考える輪が広まればと思います。

このような貴重な体験ができる企画をしてくださった宮永先生はじめ、核燃・だまっちゃおられん津軽の会の皆様、ご協力いただいた各関係者の皆様、ありがとうございました。

二宮真衣（弘前大学人文学部現代社会課程）

学生の三浦です。この素晴らしい企画に参加させていただきありがとうございました。

今までなかなか目を向けることが無かった問題が地域社会に与える影響の大きさに気付かされ、このような勉強を続けていかなければならないと感じさせられました。

移動のバスの中でも大学の先生方や参加者のみなさんから、様々な視点からお話を聞くことができ、こちらからの質問にも皆さんで答えて頂きました。こんなに贅沢な学習機会は他にはないと思います！

また機会があれば是非参加させていただきたい、そしてもっと多くの学生にも参加してほしい。そう感じさせられました。

本当にありがとうございました！（弘前大学教育学部専門課程）



△ みんななんだか楽しそう～～（笑）

海外返還廃棄物受け入れの是非めぐり

## 県の公聴会で意見陳述

8月9日（月）ホテル青森で、県は、県内各業界の代表や学識者等から海外返還廃棄物の受け入れの是非に関する意見聴取を行いました。だまっちゃんおられん津軽の会も反核団体のひとつとして招聘され代表の宮永崇史さんが意見を述べました。発言要旨は以下のとおりです。



△ 中央最前列右から3人目が宮永代表

結論は、最終処分地が決まっていない現状では、この核のゴミは受入れるべきではないと考えます。その理由を以下5点にわたって述べます。

1. 新聞「東奥日報」は、7月20日の社説で、受入れ問題についての国の姿勢を批判し、「確約より最終処分地を示せ」と主張しました。日本各地の原発から生じる使用済核燃料が、再処理のため次々と青森県に運ばれ、一時貯蔵されています。国は、繰り返し、青森県を最終処分地にしないと確約を重ねていますが、肝心の搬出先探しに進展は見られません。国の原子力委員会の幹部が「最終処分は100年200年単位の事業だから慌てない方がいい」と述べたそうですが、問題を先送りする無責任な発言だと言わざるを得ません。こうした発言を招く要因に、これまでの県の姿勢があると考えます。県自身も、空証文になりかねない「国の確約」に依拠して核燃マネーを引き出し、県の産業振興を図る、という政策をとってきました。県民の不安をカネに置き換えることはもうやめて、自然豊かな青森県の特長を生かした政策に転換させるべきです。
2. イギリスからの低レベル放射性廃棄物は、同等の放射線影響量の高レベル廃棄物に置き換えて運ぶ「単一変換方式」とするとのことです。チェック検討委員会は、これを「合理的」と評価しました。しかし、国にとっては合理的かもしれませんが、ゴミを受入れる現地は、リスクが一層高まることになります。検討委員会は、安全に管理するので心配ないと言いますが、そもそも、安全性の問題では、再処理工場の真下に活断層の存在を指摘する学説もあり、一方的な主張とのそしりは免れません。新潟県のように、県は国や日本原燃の主張に異を唱えている科学者も交え、県民にもその公平さが担保できるような組織を作り、安全性を議論するべきです。それなしに、県民の不安は解消されません。
3. 国の搬出先探しに進展が見られないのは、県の弱腰が要因の一つです。今回の海外からの低レベル放射性廃棄物の受入れに関しては、最終処分地が決まるまでは、原発の規模に応じて各原発サイトに保管してもらいたい、という原則を県は主張すべきです。有識者による安全性チェック検討会は、海外からの低レベル放射性廃棄物は安全に管理できるという結論を出しましたが、それならば、同様の施設を各地の原発サイトに建設してもらうことを提案してはどうでしょうか。六ヶ所集中方式よりももちろんコストはかかりますが、これくらいは電気料金として国民に負担してもらえばいいでしょう。受益者がリスクを広く平等に負担する、という視点は、とりわけこうした迷惑施設をどうするか、という問題では大事にすべきです。もちろん、青森県自身も、抱えている原発の規模に応じたリスクを負担しなければなりません。これならば県民の同意は得られるものと考えます。

まだ再処理工場が稼働すらしていない今、当初の予定になかった海外からの廃棄物を受け入れるということは、安全性さえ担保されれば、「最終処理地」も青森県が引き受けますよ、ということの内々にアピールすることにもなりかねないことを県知事は肝に銘じるべきです。

4. 六ヶ所再処理工場が処理をする高レベル放射性廃棄物が環境に及ぼす影響は、日本では未経験のもので、イギリスセラフィールドや、フランスのラアグなどの地域周辺では白血病の発生率が増えたとの報告がありますが、国としての正式な調査はされていません。だからこそ、多くの県民は不安を抱いており、県も小児がんの発生に関する継続的な調査をしているのだと思います。しかし、小児がんが増えているという結果が出てからでは遅いのです。肝要なことは、小児がんのリスクを心配しなくとも済むような環境作りではないでしょうか。海外からの低レベル放射性廃棄物の受け入れは、いくら安全性を唱えたとしても、こうした環境作りに逆行するものであることは明らかです。

5. 国や電事連は、首都から遠く離れている下北半島を、日本全国の核のゴミ捨て場、貯蔵場所とするのがコスト的にも合理的だ、と考えています。青森県は県民所得も全国最低レベルにある貧乏な県です。迷惑施設と引き替えにカネを出せば多少のトラブルはあっても、受入れてくれるに違いない、との読みが透けて見えます。こうした手法で県内に、極東最大の米軍基地が出来、核燃再処理工場が出来、原発が出来ました。しかし、外部からの補助金に依存した地域づくりは、麻薬患者のようなもので、一度受入れると抜け出すことが出来なくなってしまいます。東通村が地方交付税交付団体に転落したとの記事が報道されていましたが、村長はさらなる施設建設・着工を進めて欲しいとのコメントを出していました。しかし人類は、まだ核エネルギーの制御を自らのものにしていません。今生きている私たちはもちろん、何十、何百世代、子々孫々にわたって、遺伝子に影響を及ぼしかねない危険性を、原子力エネルギーは秘めています。東通村の議会は最終処分地問題の勉強会も開催しました。危険施設を受入れて地域振興を図る手法に、私たちは大きな危うさを感じています。県知事は、県内の地域振興を図る上で、県民がこの地で安全・安心に暮らしていく、という最低限の信託に応える責任があります。

以上の物差しから、県知事は海外からの低レベル放射性廃棄物受入れ問題を判断してほしいと思います。

最後ですが、今回の意見公聴会で意見聴取を行なう団体の選出にあたり、どのような基準でどなたが判断されたのかが、私たちにはよくわかりません。公聴会への参加を募り、発言したい団体を分け隔てなくその機会を保障すべきではなかったのではないのでしょうか。また、公聴会で話された内容は県のホームページなどで公開すべきである、ということを申し添えて、私からの発言を終わります。

だまっちゃんおられん祭り街宣第2弾

## ねぷた祭り街宣実施

8月4日（水）10名が参加して、核燃反対ねぷた祭り街宣をヨーカドー前にて実施しました。海外からの低レベル放射性廃棄物受入れ拒否の要請ハガキとチラシ150枚を準備、配布しましたが、さすが祭り期間中は人通りが多く、30分程度で配布してしまいました。恒例のリレートークも、順番待ちになるほど積極的に参加者が市民に訴えていました。



△街頭宣伝する安藤代表

## 核燃問題を考えるテーマ講座後期開講へ

弘前大学では、主に1年生を対象に「21世紀教育」という教養科目を開講しています。当会の弘大ランチでは、学生に核燃の危険性を伝え、地域問題、エネルギー政策につながる幅広い問題意識を喚起したいと21世紀教育での授業の開講を準備してきました。このたび、安藤房治教授（教育学部）、大坪正一教授（教育学部）、倉坪茂彦教授（理工学部）、鈴木裕史准教授（理工学部大学院教授）、福田進治准教授（人文学部）宮永崇史教授（理工学部大学院）、泉谷真実教授（農学部）の7人の教授陣により、「環境と共生」分野での後期2単位の授業の開講が申請されました。

授業の概要は、「環境との共生という視点から青森県の現状と未来を考える。具体的には青森県の経済、財政、地域社会、核燃問題、米軍基地問題、自然エネルギー開発などを取り上げる」とされ、授業としての具体的到達目標には「多方面から青森県の現状を評価する目を養い、今後の政策のあり方を考える力をつける。さらに、青森県に限らず同様の地方都市の抱える問題に応用する力をつける」を掲げています。

講義は、正式に聴講するには煩雑な手続きや受講料が必要になります。弘大ランチでは、ビデオや講義ノート等の公開、同内容での市民講座の開講など、市民の皆さんへの情報還元の方法について検討中です。担当教授が認めた場合は、少人数であれば例外的に教室に入れることも可能だそうですので、聴講希望の方は、事務局にご相談ください。時間割は9月半ば頃の決定となります。

### 関連施設 最新情報

#### 再処理工場

- 再処理工場のウランとプルトニウムを分離する建屋で温度計に放射性廃棄物が付着し、作業員2人が被曝するという事故がありました。高レベル廃液濃縮管から温度計（長さ12メートル）を引き出した際、先端に微量の廃棄物が付着していたものです。原燃は、直径3センチの温度計

保護管の中を洗浄して原因を調査する方針です。（2010・8・10）

- 六ヶ所再処理工場のガラス熔融炉内部の天井から対火レンガが落下したトラブルで、日本原燃は、熔融したガラス等を抜き出して熔融炉内部を調査した結果、レンガによる損傷は見当たらなかったと発表しました。最終報告書では、レンガ落下の再発防止策として、熔融炉の温度降下速度を緩やかにすることや、今後設備更新する熔融炉については、落下しにくい構造・形状のレンガにすること等も盛り込まれています。（2010. 7. 29）

#### 海外再処理廃棄物受入れ

- 英仏両国から返還される低レベル放射性廃棄物について、三村知事は19日に県庁で会見し、「総合的に判断した結果、了解すべきとの判断に至った」と述べ、六ヶ所村への受入れ容認を表明しました。国と事業者が要請してからわずか5ヶ月での決断。県知事は、受入れを決めた理由について、①1985年に締結した核燃料サイクル施設の立地基本協定に含まれる②国と事業者が安全確保を約束している③県議会や県内各界隠そうが大筋で受入れを容認している、点を挙げています。（2010. 8. 20）

## 廃棄物処理

・東北電力・東通原発1号機における低レベル放射性固体廃棄物貯蔵所の増設について、県と東通村は、7月14日に同社の増設計画を了解しました。保管するものは、定期検査などの際に発生するゴム手袋などの雑固体廃棄物をドラム缶に詰めたものです。現在の貯蔵所は、2012年に一杯になるため貯蔵所の南側に同規模の施設を建設する方針。(2010. 7. 15)

## 原発

・敦賀原発1号機で、原子炉格納容器内ポンプの溶接部分について、運転当初から40年間も検査をしていなかったことが明らかになりました。管理者である日本原子力発電は、溶接部分があるとは知らなかったとしています。同社の説明によると、来年から始まる定期検査で同ポンプの取替え工事を検討中で、米国メーカーからポンプの設計図を取り寄せたところ溶接部分があることが分かったということです。(2010. 7. 22)

・高速増殖炉もんじゅで、使用済み核燃料などを保管するプールの水循環ポンプが動かなくなったほか、原子炉補助建物の空調の廃刊が目詰まりを起こすトラブルがあったと発表しました。配管の目詰まりは、海水漏洩検出器の警報が鳴って発覚し、地下3階で排水溝から水があふれ下の階に垂れていたということです。(2010. 7. 21)

# だまっちゃおられん活動報告

- 6月 9日 (水) 第2回運営委員会  
6月17日 (木) 核燃紙芝居上演・津軽保健生協河西福寿草班(4名・竹浪)  
6月20日 (日) 核燃バルーンメッセンジャーオペレーション下見(3名・三浦、竹浪)  
6月18日 (金) 弘大ランチ会議(8名・宮永、大坪、安藤、福田、太田、下山、鈴木、三浦)  
6月27日 (日) 青森県母親大会核燃分科会に助言者と司会で参加(大坪、三浦)  
於、五所川原 参加者15名 スタッフ1人 大坪宮永パンフ:22冊頒布  
6月30日 (水) 核燃バルーンメッセンジャーオペレーションリハーサル(7名・木村、高松、三浦)  
7月 1日 (木) 事務局会議(三浦、竹浪)  
7月 4日 (日) 弘大ランチ核燃バルーンメッセンジャーオペレーション  
(29名・宮永、大坪、木村、福田、安藤、高松、三浦、竹浪)  
7月15日 (木) バルーンはがき1枚到着(横浜町雲雀平1-6より)放出地点より約8km  
7月15日 (木) 第3回運営委員会  
7月27日 (火) 県より安藤代表に県の意見公聴会での意見陳述の打診あり。了解する。  
7月30日 (金) 県より正式に意見陳述要請文書  
8月 4日 (水) 核燃街宣(於、ヨーカドー前)海外からの低レベル放射性廃棄物受入れ拒否の要請ハガキとチラシ150枚配布  
8月 9日 (月) 県の意見公聴会で宮永代表意見陳述(宮永、高松)於、ホテル青森  
8月12日 (木) 第4回運営委員会(安藤、佐藤、小西、藤原、坂本、二川原、中澤、仁平、三浦、竹浪)

## <ブログ発行状況>

- 6/14 核燃・バルーンメッセンジャーOp参加募集中(三浦)  
6/23 UFOキャッチャー(三浦)  
6/29 第54回青森県母親大会に参加(三浦)  
6/30 核燃サイクル交付金は病院に(三浦)  
7/5 核燃バルーン大作戦(三浦)  
7/7 苦労と教訓(三浦)  
7/9 核燃・あいうえお大作戦(1)(三浦)  
7/15 速報!核燃ばるーん ハガキ第1号が帰ってきました(三浦)  
7/27 ばるーんその後(三浦)  
8/3 海外返還廃棄物の穴所受入れに反対しよう(三浦)

ブログアドレス: <http://blogs.yahoo.co.jp/damattya/>

発 行 : 核燃料サイクル施設立地反対津軽地区連絡会議事務局

連絡先 : 080-5229-6076 (竹浪) takenami@coral.ocn.ne.jp

# だまっちゃんおられん掲示板

10月17日(日)

## 核燃反対チャリンコごーごーキャラバン実施!

集合場所、参加費等の詳細は、近くチラシでお知らせ致します。  
実施日時は決定です。終了後は、恒例のバーベキュー大会を行いますのでお楽しみに!



9月25日(土)~26日(日)

## 原発問題市民運動全国交流集会(静岡)で開催

参加者を募集しています。派遣費のカンパ運動を行いますので、参加してみたいという方はご相談ください。要綱欲しい方は、事務局にご連絡ください。

## 核燃カードゲーム作成中!

当会では、遊びながら核燃問題を考えるゲームの製作に取り組んでいます。試作品として3種類のカードゲームが完成しました。原子力半島編は、再処理工場や原子力発電所、中間貯蔵施設などを押しつけ合うゲームで、伏せたカードにイエス・ノーの意思表示をし、当たれば持ち帰り、外れれば持ち帰らせることができます。核燃マネーカードが3枚たまるとノーが言えなくなるという真実味のあるルールも設定されています。電力会社編では、東京電力、東北電力などの電力会社が協力して原子力政策を進めようという内容、大事故編では、大事故に向かってポイントが積み重なるのを新エネルギー開発カードや住民運動カードを使って止めるというルールになっています。全て4人~6人で遊びます。定価は、¥700程度を予定しています。試作品見てみたい方はご連絡ください。欲しい方、予約受けつけます。

### 【編集後記】

三村知事は、英仏両国から返還される低レベル廃棄物の六ヶ所受入れを表明しました。知事は、受入れを決めた理由について、1、1985年に締結した核燃料サイクル施設の立地基本協定に含まれる、2、国と事業者が安全確保を約束している、3、県議会や県内各界各層が大筋で受入れを容認していることを挙げたそうです。最初から出来レースだったのでは?という気にもなってきます。9日にホテル青森で行われた公聴会は、ものものしい雰囲気だったそうです。県庁内の会議室で行うということせず、お金をかけてホテルの会場を準備し、ものものしい雰囲気を盛り上げて、「話は、一応聞いたよ」というアリバイを作っただけ、知事のスピード判断をみていると、そんなことを言っただけで済ませたいのも分かります。本当に、心底県民の将来と安全のことを考えて決断した、とおっしゃるのでしょね、三村知事!

国は、最終処分地を本当に真剣に探そうとしているといえるのか、トラブルや事故が起こるたびに、「不退転の決意」を繰り返している日本原燃を、本当に信用できるのか、廃棄物管理や施設等の「実績」が積みあがっていく六ヶ所が、将来的に絶対に最終処分地にならないという確信は、一体、この楽天的な自信はどこから生まれるのだろうかと思いに思えます。

